BATTLE
FUCKERS
Vol.7+8
-MENA○-
-SAKU○A-

「お主と交わるとはな、これも神より与えられた試練か」
「う、うう……緊張するけど、これも師匠に近づくため、頑張ります！」
「ふう、肌の色艶、ほどよい大きさの乳房と尻、いい身体をしているな。しかし安心しろ。私は悟りを極める者、色欲に溺れて狂うことはない」
「んっ！あ、ありがとうございます
（そのくせ、この人のおチンポ……すごい勃起してる）」

ピュ♥
ピュル
プシャアアル
ピュル

「ど、どうですか？お師匠様直伝のテコキ術なんですけど」
「あ、ああ。カリ裏と裏筋を重点的に責めて、上手だ」
「イキたくなったら、いつでもイッていいんですよ？」
「私は禁欲中の身だそう簡単にイク訳には……ぐうう！」
「うわわ、おチンポビクンビクンしていまにもイキそう。
そ、そういえばいくらヨーガでもチンポは伸びないんですね？」

ドビュッ！
ビュッ！
ビュルル！

「ジュプ……ジュポ！ほーれすか？お師匠様直伝のおフェラ術ですよ？」
「ぐ、ぐぐぐ……これはなかなかの口淫術だ」
「ジュプ、ジュプ、あ、カリ裏も汚れてるからお掃除してあげまふ」
「う、うぅ！カリの溝まで舌が丁寧に動いて……」
「ジュポ、ジュププ！そろそろイキそうでふか？……グッポグッポ！」

ドビュ!
ビュル!
ビュ!

「はい、今度はパイズリです。好きなだけ動いてください」
「そ、そうか。では遠慮なく」
「あ、このオチンポとっても熱い！
射精したばかりなのにマグマのように固くなってる」
「ぐっ！両手で乳圧を調整している……だと！？
奥に入れるにしたがって乳圧が強くなり、
抜こうとしてもチンポに絡んで離れない、なかなかの技だ」
「こ、これももちろんお師匠様の直伝です」

ドビュッ!
どぴゅ!

「オマンコ見ながら足コキされたいなんて結構変態さんですね」
「く、色欲に流されるとはなんたる腑抜けか！
しかしお前も触れられてもいないのに愛液を漏らしていては、
まだまだ修行が足りないぞ」
「そ、それは言ってはいけません！」

ビュク！
ドビュ！
ビュル！

「が、顔面騎乗だなんて変わった趣味をお持ちなんですね」
「男として、女性の性器に興味を持つのは当然のことだ」
「ん……はぁん、そんな変なところ舐めたら、ん……汚いですよ」
「舐めれば舐めるほど汁が溢れてくる、まさに女体の神秘だ。
水は貴重だからな、ゴクゴク」
「イヤ～！この人、私のマン汁……飲んでる」

パシュアアッ ビュール

「んっ！んっ！このチンポ、本当にあッつい！
オマンコの中、火傷しそう！」
「お前の膣こそ、うねうねと動いてチンポにまとわりついてくるな
突く度に愛液が漏れて、なかなかの名器だ」
「あっ！あっ！気持ちいい！オチンポいい！
修行でオナニーも禁止されてたから、たまらなくいいです！
ああっ！セックス最高！！」

ドビュ!
ビュルルル!
ゴボォォ♡

「んっ！ジュポッ！ジュププ！グッポ！」
「ぐっ！試合を忘れ色欲に乱れたお前には、イラマチオの罰を与える」
「んんっ！ジュポッ！グッポグッポ！
……なに言ってるんですか！女性の口を性器に見立てて乱暴に腰振って、
どっちがケダモノかわかりませんよ、グッポ！グッポ！」
「う、うるさい！ちゃんとザーメンも飲み干すんだぞ！」

ドビュッ！
ビュ！ビュル！

「ウオオオオ！もう禁欲なんて知るか！お前を犯しつくしてやる！」
「あんっ！やっと自分に正直になりましたね！
それがいいって占いにも……はあん！！」
「女！修行の身のくせしてお前もなかなかのスキモノじゃないか！
チンポで突く度、ケツを叩く度よがりやがって！この淫乱占い師が！」
「んっ！んっ！そ、そうなんです！
私結構乱暴にされるのが好きで……いやぁあん！」

ドビュ！
ビュ！
ビュル！

「はあああああんっ！うそ！？そんな深いところまで！」
「どうだ！これこそがヨーガの秘術だ！」
「んんんっ！子宮開けられるほど深く突いたあと、
そんなゆっくり引き抜くのダメ！
オマンコがオチンポの形覚えちゃうからやめて！」
「ハハハ！私は女をゆっくりと嬲るのが好きなのだ。すぐにはイカさぬぞ」
「んんんっ！こんなゆっくりピストンされたら、
深いアクメが来ちゃうううう！！」

ドビュ！
ビュ！
ビュ！

「お、お尻ホジホジいいっ！お尻ズボズボ大好き～っ！！」
「くっ！こんなに簡単に深く入って……お尻も開発済みか！」
「そ、そうなんです！修行中に手慰みは禁止されてたけど、お尻なら大丈夫だと思ってよくイジってたん……いやぁん！」
「尻の緩い占い師の占いなど、誰も信じないぞ？」
「んっ！はぁっ！カリがひっかっかって、ピストン深くておかしくなっちゃう！」

ドビュ！
ビュルルル！

「……い、いっぱい出ましたね。お腹の中がザーメンで重いです」
「す、すまぬ。禁欲生活が続いていて溜まっていたようだ」
「あなたのザーメン多すぎて溢れてきちゃいます。
赤ちゃん、出来てないといいですけど」
「し、しまった！私には妻と子供が……」
「なんて冗談です。私の占いでは今日は性行為は安全だって出てますから、
また安全な日にお手合わせしましょう」

ゴボォレ
ブビュ♥
ドビュレ

K.O.

K.O.

「はぁ……どうですか、タ○さん」
「うおぉ！気持ちいい！！」
「手と足で同時にコいて欲しいだなんて、結構変態さんですね」
「さく○の足の臭い嗅ぎながら、手コキされるなんて、たまんねえぜ！」
「ふふ、いつでもイって大丈夫ですよ！」

ドビュ!
ビュ!
ビュル!

「あぁぁん！そんな広げないでください！」
「何ぃ！？アナルなのにやけにスルスル入ってくるじゃねえか！」
「そりゃあ、私も女性格闘家ですもん！
負ければ色々な目に会っちゃいますよ！」
「ちくしょう！俺のさく○が！
……この野郎！おしおきしてやる！」
「あっ！そんな奥まで入れちゃ！んんっ！！」

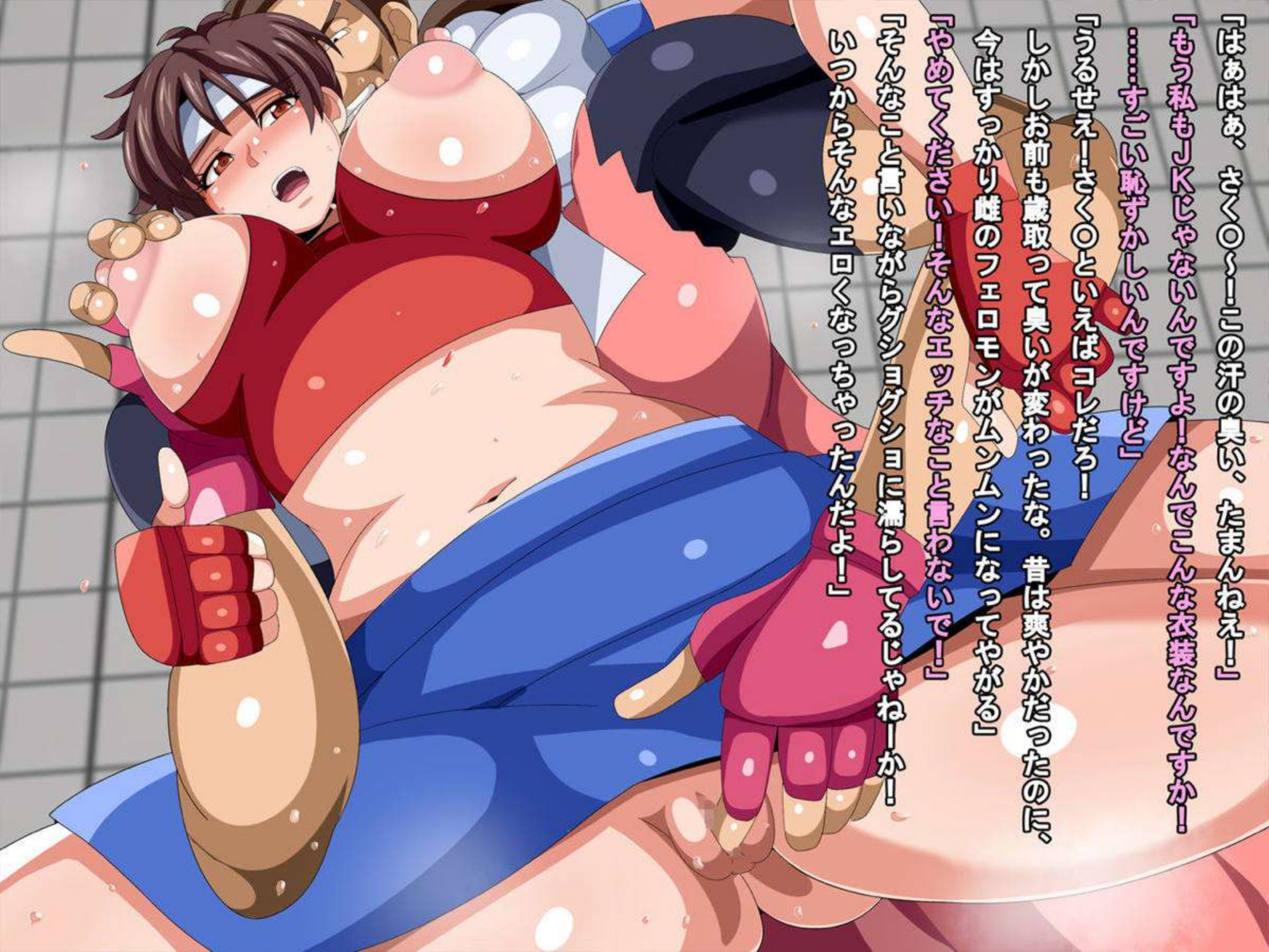
イシャアアー♥

ピュッ♥

ピュッ♥

「ペロ…ジュブ…！ほ、ほーれすか？ジュポッ！ジュププ！」
「うおお！腰が抜ける！さく○スゴイぞ！なんてフェラチオだ！」
「もう……全然褒められても嬉しくないです！
ジュポっ！グポッ！グポッ！」
「あんな無垢で素直なさく○がこんな卑猥な行為を……うおおお！」
「もう、いちいちうるさいなあ……ジュポジュポっ！ジュズポポ！」

ドビュ!
ビュル♥
ビュル♥


「はぁはぁ、さく〇〜！この汗の臭い、たまんねぇ！」
「もう私もJKじゃないんですよ！なんでこんな衣装なんですか！
……すごい恥ずかしいんですけど」
「うるせぇ！さく〇といえばコレだろ！
しかしお前も歳取って臭いが変わったな。昔は爽やかだったのに、
今はすっかり雌のフェロモンがムンムンになってやがる」
「やめてください！そんなエッチなこと言わないで！」
「そんなこと言いながらグショグショに濡らしてるじゃねーか！
いつからそんなエロくなっちゃったんだよ！」

プシャアアアー
ビュー

「うおおお！さく○のワキ、代謝いいからすげえ蒸れて……
めっちゃ熱いぜ！」
「うう、私の汗と夕○さんのチンポの我慢汁で、すごい臭いがします。
こんなもの嗅いでると、頭バカになりそう」
「ハァハァ……ずっとこのワキでチンポをコキたかったんだよ！
あの頃はワキ毛の処理も甘かったのに、すっかり色気づきやがって！」
「そ、そんなエッチなこと考えながら私と手合わせしてたなんて……
いいですよ。あの時のこと思い出していっぱいズリズリしてくださいね」

ドビュッ!
ビュッ!
ビュルル♥

「ふんっ！ふんっ！ふんっ！ふんっ！」
「ああん！んんっ！ああ！ああんっ！」
「チンポを抜く度にヒダがくっついてきて、なんてエロマンコだ」
「んっ！あああん！
ダ○さんのデカチンポのカリが引っ掻いてくるからですよ！」
「そりゃどうかな！ピストンするほどデカ尻が揺れて、
マン汁がグッショリ中から溢れてくる。
こりゃ、立派なド淫乱マンコだぜ！」
「んんっ！そ、そうです！も、もっと突いてえ！」

ドビュ！
ビュルル♥
ビュク♥

「ジュブージュボボージュブボボー」
「ぐおっ！言われてもいないのお掃除フェラだなんて、うおおおお！」
「ジュポージュポー……チンポ、また大きくなってまふよ。
グポポージュロロー」
「根本までしっかり吸い付いてきて、丹念にザーメン絞ってくる。
……くっ、またイキそうだぜ」
「いいれふよ。ジュボーグポー……またひてくらはい」

ドビュ!
ビュル!
ビュル♡

「まさか、お前の乳がこんなデカパイだったとはな」
「んしょ……私はダ○さんのチンポが
パイズリ突き抜けるほどデカマラだって知ってましたよ！」
「いつも修行が終わった後、私の汚れた下着嗅いで
オナニーしてたの見てましたもん」
「な、なんだと！見られていたのか！？」
「はい。……だからこれは汚された下着のお返しです！」
「ぐおあ！すごい乳圧だ！油断するとすぐザーメン出しちまうぜ」

ドビュルル♥
ビュルル♥
ビュ♥

「んんっ！はぁんっ！……ど、どうですか私の騎乗位は」
「くっ！た、たまらねえ膣圧だぜ！
ま、まさか俺の日頃の指導が、セックスで役立つなんてな」
「んんっ……そ、そうですね。私も最強目指して格闘家やってたけど、
最近はセックスの方が痛くなくて気持ちいいし、
楽しいんじゃないかって思ってるんです！」
「どうだ？同じ弱キャラ同士……畑を変えるかい？」
「んんっ！あぁっ……そ、それもいいかもしれません」

ドビュ♥
ビュ♥
ビュク♥

「弟子ばっかりにいいようにされるのも癪だしな！
俺も張り切らせてもらうぜ！」
「んんっ！よ、よろしくお願いします！
ああっ！！す、すごい！……そこ、いいです！」
「ふん！ふん！こ、こうか！重点的に突いてやるぜ！」
「あっ！ああん！タ○さんのチンポ、反りあがってて、
気持ちいい所引っ掻いてくる！
ああっ！気持ちよすぎて、頭がおかしくなっちゃう！」

ドビュ！
ビュルル！

「うおおおー！くらえー！サイキョー流セックス術だあ―！」
「ああん！すごい！んっ！奥までズンズン突かれて、
お腹の中響いてくるぅ―！」
「俺はずっとこうして、お前を思う存分犯したかったんだ！
くそ―！うおお！」
「あぁん！手とり足とり教えるとか言って、
私の胸やお尻を触ってたこと―ダ○さん覚えてますか！」
「ああ、覚えてるぜ！あれはサイキョーのオカズだった」
「んっ！ああん！……あの時、私も触られて感じてたんですよ」
「うおおおー！さく○―！」

ビュルル!
ビュ!
ドビュ♥

「はぁ、はぁ……いっぱい出ましたね。ダ○さんのザーメン、全部入らなくて溢れてます」
「あ、当たり前だ！長年のさく○への想いを全部出したからな」
「どうしよう。こんなに中でたくさん出したら、絶対赤ちゃん出来てますよね」
「ゲッ！……く、くそ。もし出来てたとしても俺は」
「なんて、冗談ですよ！しっかりピル飲んでるから大丈夫ですよ。……また手合わせお願いしますね！」
「お？……お、おう！」

ゴポォ
ピュ
ドロ♥

K.O.

K.O.